

The Woman Who Vanished in

The Woman Who Vanished in Izu

The Woman Who Vanished in Izumi

伊豆の海に消えた女

長編推理小說

Nishimura Kyotaro

西村京太郎



光文社文庫

KOBUNSHA BUNKO

長編推理小説

伊豆の海に消えた女

著 者 ^{にしむら きょうたろう} 西村京太郎

1991年12月20日 初版1刷発行

発行者	大	坪	昌	夫
印刷	大	日	本	印 刷
製本	大	日	本	製 本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03 (3942) 2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Kyōtarō Nishimura 1991

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-71437-4 Printed in Japan

光文社文庫

長編推理小説

伊豆の海に消えた女

西村京太郎

光 文 社

伊豆の海に消えた女・目次

第一章	踊り子3号	5
第二章	リゾート	21
第三章	石廊崎 いろうざき	54
第四章	捜査会議	76
第五章	事件の再開	99
第六章	三人の女	122
第七章	疑惑	146
第八章	一つの推理	171
第九章	ひかり5号	195
第十章	ワープロ	220
第十一章	過去の影	245
第十二章	最後の告白	268
解説	香山三三郎 かやまふみろう	292

第一章 踊り子3号

1

改札口を出たところで、酒井修^{さかいおさむ}は、急に気が変わった。

彼の勤める中央商事本社は、東京駅の丸の内口を出て、歩いて十五、六分のところにある。酒井は、大手商社の一つである中央商事に入って二年になる。

エリート商社員といってくれる人もあるし、両親は、彼が中央商事に入社が決まったとき、大喜びしてくれたものだった。

それから二年間、酒井は、忠実に会社で働いてきたし、これからも働くつもりでいる。

それが、今朝、いつものとおり、東京駅の改札口に出たところで、足が止まってしまったのだ。

毎日の決まり切った繰り返しに、ふと、逆らってみたくなったのである。

反抗などという、大それたものではなかった。

気まぐれといったほうが、いいだろう。

改札口から溢れ出てきたサラリーマンたちは、ビジネス街に向かって、どんどん流れていく。いつもなら、酒井も、その流れの中に入っているのだが、今日は、その流れの中で止まっている。

それが、快感であった。

今日一日、休暇届も出さず、気ままに過ごしてみたい。

(ちよっとした冒険なんだ)

と、酒井は自分にいい聞かせた。

幸い、今日は金曜日だから、今日休めば、三日間休める。

二日前が給料日だったので、ふところは温かい。

酒井は、切符売場のほうへ、歩いていった。

短い旅に出てみたくなったのである。

酒井は、今から十八分後の午前九時ジャストに出るし特急「踊り子3号」に乗ることにした。

奮発して、グリーンの切符を買った。

前から、東海道線のホームに停まっている「踊り子」のヘッドマークや、白い車体にグリー

ンの斜線が入った色彩を見て、一度は下田まで行ってみたいと思っていたのである。

ホームにあがったが、彼の乗る「踊り子3号」は、まだ入線していなかった。

だいたい色の普通列車が、停車していて、アナウンスは、この列車のあとに「踊り子3号」が入ってくるといっている。

酒井はベンチに腰を下ろして、煙草に火をつけた。

いつもなら、今ごろ会社のエレベーターに乗っているだろう。いや、もう、エレベーターから降りて、営業第一課の部屋に入り、自分の机の前に腰を下ろしているかもしれない。

女子社員が、お茶を運んでくる。九時までのわずかな時間、朝刊を読んだり、隣りの井上と馬鹿話をしたりする。

二年間、毎朝、同じことを繰り返してきた。

別に、それを嫌だと思ったことはなかった。今年入社した女子社員は、なかなか可愛いし、井上だって、いい奴だ。

だが、今日は、その繰り返しだが、ちょっとこわれる。

あの娘は「酒井さんは、休みなのかしら？」と首をかしげながら、お茶を置いているかもしれない。

井上は、きつと、「カゼでもひいたかな」と呟いているだろう。昨日、退社するとき、酒井がくしゃみをしていたからだ。

「あのー、失礼ですけど」

と、ふいに声をかけられて、酒井は顔をあげた。

二十五、六歳の女が、酒井に微笑^{ほほえ}みかけてきた。

うすいブルーのサングラスの奥の大きな眼が、印象的な顔だった。

その眼に、見つめられて、酒井は何となくどぎまぎしながら、

「僕ですか？」

「ええ。失礼ですけど、『踊り子』にお乗りになるんでしょうか？」

と、女がきいた。

「ええ、下田まで行くつもりですが」

「よかった」

と、女はニッコリ笑ってから、

「これを、ちよっと、見ていていただきたいんです。すぐ戻ってきますけど」

といい、白いスーツケースを酒井に見せた。

酒井は、そんなことならと思い、

「いいですよ」

「すみません。すぐ戻りますわ」

と、女は重ねていい、スーツケースを置いて、階段の方向に小走りに歩いていった。

酒井は、彼女が淡いブルーのコートの裾をひるがえして、階段を駆けおりていくのを見送った。

(きれいな脚だな)

と、思った。

今日の気まぐれの旅が、いっそう楽しくなりそうな気がした。

2

普通列車が出ていったあとに、白い車体にグリーンの斜線の入った「踊り子3号」が、ゆっくりと入線してきた。

通勤の途中に、ときとき眺めては乗ってみたいと思っていた列車である。

ホームで待っていた乗客が、次々に乗っていく。

だが、酒井にスーツケースを預けていった女は、なかなか、戻ってこなかった。発車時刻が迫ってきて、酒井は、次第にいらいらしてきた。

(何をしているんだろう?)

と、酒井が階段の方向を睨んだとき、彼女か、息を弾ませながら駆けあがってきた。

「ごめんなさい。おそくなつて」

と、女はデイトにおくれた恋人みたいないい方をしてから、

「乗りましょう」

「僕が持ちますよ」

酒井は、スーツケースを持って、女と一緒にグリーンの4号車に乗り込んだ。

十二両編成で、1号車から7号車までが下田行き、あとの五両は修善寺行きである。

ウィークデイなのと、朝の早い列車のせいかな、車内はすいていたが、女は当然のように酒井の隣りに腰を下ろした。

酒井も、内心期待していたので、彼女が隣りに座ってくれたことが嬉しかった。

「お礼と、お詫びといっでは、おかしいんですけど」

と、女は微笑しながら、手に持っていたみかんを三つ、酒井の手に押しつけた。

「いいんですか？」

「キオスクで、買ってきたんです」

と、彼女が、いったとき、二人の乗った「踊り子3号」が発車した。

ホームを出ると、明るい太陽が、突然、窓から射し込んできた。

「いい天気になりそう」

と、女がいった。

「もう伊豆は、暖ったかいでしょうね」

酒井は、心が弾んでくるのを覚えながら窓の外に眼をやった。

四月八日。伊豆ではもう、桜が満開になっているかもしれない。

車掌が車内検札に廻ってきた。

女は、自分の切符を見せた。

「本当は、向こうの席なんですけど、ここでも構わないでしょう？」

と、車掌にきいている。

「すいているから、構いませんよ」

と、車掌はいった。

酒井は、そんなやりとりを聞いていた。

「本当にいいんですか？」

と、女の横顔に声をかけた。

女は、みかんの皮をむきながら、

「何が？」

「いや、ここにいてですよ」

「ご迷惑なら向こうに行きますけど」

「とんでもない。ただ、誰か、連れがいるんなら、悪いなと思って」

「私は、気ままな、ひとり旅」

と、女はいった。

「僕もなんです」

酒井は、内ポケットから名刺を出して、彼女に渡した。中央商事の肩書がついた名刺なら、女も信用するだろうと思つたのである。

案の定、彼女は「中央商事の方なの」と、いった。

「そのエリートサラリーマン？」

「エリートかどうかわかりませんよ」

「あの会社には、なかなか入れないんでしょう？」

「そういわれていますがね」

酒井は、ちよつと得意だった。

「私は、生田^{いぐさ}くみ子。名刺は持っていますけど」

「何をやっていらっしゃるんです？」

「OLじゃありませんわ」

「と、すると、何だろうなあ」

酒井は、身体をねじ曲げて、女の顔や胸のあたりを、遠慮なく見つめた。

改めて、華やかな雰囲気を持った女性だな、と思つた。

酒井にもガールフレンドはいる。大学の後輩で、今年、社会人になった女である。だが、今、

眼の前にいる女に比べると、彼女は子供に思えてきた。

「モデルをやっているの」

と、女がいった。

「道理でねえ」

「何がかしら？」

と、女、生田くみ子が首をかしげた。

「きれいで、スタイルがいいから」

「ふふ」

と彼女が、笑った。

「じゃあ、今日は、休みなんですか？」

「本当は、お昼からCM撮影の仕事があつたんですけど、急に嫌になって逃げだしたの」と、くみ子は、笑いながらいった。

「へえ、面白いな」

「何が？」

「僕も、急に出社するのが嫌になって、この列車に乗ってしまったんですよ」

「本当？」

「本当ですよ。今ごろ、課長が、無断欠勤なんかしてけしからんと、怒ってるかもしれませ

ん」

「こういうのは、何ていうのかしら？ 同病あいあわれむでもないし——」

「似た者同士かな」

と、いつてから、酒井は、照れた顔になった。

3

東京を出たあと、品川、川崎、横浜と、停車していく。

最近、特急列車の窓は開かないものだが、この「踊り子3号」は古い列車を改造したものであるせいか、窓が開く。

酒井は、少し開けて風を入れた。

それだけ、車内は暖かい。くみ子もコートを脱いでいた。

(モデルか)

酒井は、ちらちら、横の女に眼をやった。

白いドレスの、大きくカットされた胸の辺りに、どうしても眼が行ってしまう。

あわてて眼をそらせて、窓の外に眼をやったが、そのうちに、肩の辺りが重くなってきた。いつの間にか、彼女が身体をもたせかけて、軽い寝息を立てているのだ。

甘い香水の匂いが、酒井をくすぐる。

酒井は、モデルの仕事が、どんなものか知らない。テレビなどで見ると華やかだが、実際には重労働なのだろう。

それで、疲れ切って逃げ出したくなり、気ままな旅に出たのではあるまいか。

身体を動かすと、彼女を起こしてしまおうと思い、酒井は首だけ回して、車内を見廻した。

網棚の上には、彼女の白いスーツケースがのっている。

（あの中には、何が入っているんだろうか？）

仕事に行く途中で、この列車に乗ってしまったのだとしたら、化粧道具や着がえの下着なんかが入っているのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、急に、酒井の眉が寄ってきた。

スーツケースの隅に、「M・K」のアルファベットが描いてあるのが、眼に入ったからである。

さっき、彼女は、「生田くみ子」と名乗ったはずである。しなやかな指先で、その字を宙に描いても見せた。

生田くみ子なら、K・Iか、I・Kでなければならぬ。

（おかしいな）

と、思った。が、すぐ、友人のスーツケースを借りてきたのかもしれないと考えた。